武蔵野日曜聖書講筵

涙の泉

――エレミヤ記第９章――

１９７４年６月９日
小池辰雄

背神、偶像崇拝、社会的不倫と乱れ　涙の泉「盲人の叫び」　天涙は霊光を受けて虹と光る
聖霊の不思議な世界　涙の泉は歓喜の泉に

【エレミヤ９】

1 ああ我わが首を水となし我目を涙の泉となすことをえんものを　我民の
女 の殺されたる者の為に昼夜哭かん　2 嗚呼われ曠野に旅人の 寓 所をえんも
のを　我民を離れてさりゆかん　彼らはみな姦淫するもの悖れる者の 族 なれば
なり　3 彼らは弓を援くがごとく其舌をもて 偽 をいだす　彼らは此地において
真実のために強からず　悪より悪にすすみまた我を知ざるなりと　エホバいいた
もう　4 汝らおのおの其 隣 に心せよ　何の兄弟をも信ずる勿れ　兄弟はみな 欺
きをなし　隣はみな讒りまわればなり　5 彼らはおのおの其隣を欺き　かつ真実を
いわず　其舌に 謊 をかたることを教え悪をなすに労る　6 汝の住居は詭譎の中
にあり　彼らは詭譎のために我を識ることをいなめりとエホバいいたもう
7 故に万軍のエホバかくいいたまえり　視よ我かれらを鎔し試むべし　われ我
民の女の事を如何になすべきや　8 彼らの舌は殺す矢のごとし　かれら 詭 をい
う　また其口をもて隣におだやかにかたれども　其心の中には害をはかるなり
9 エホバいいたもう　我これらの事のために彼らを罰せざらんや　我心はかく
ごとき民に仇を復さざらんや
10 われ山のために泣き咷び野の牧場のために悲しむ　これらは焚れて過ぐる
人なし　またここに牛羊の声をきかず　天空の鳥も獣も皆逃てさりぬ　11 われエル
サレムを邱墟とし山犬の巣となさん　またユダの諸の邑々を荒して住む人な
からしめん
12 智慧ありてこの事を暁る人は誰ぞや　エホバの口の言を受けてこれを示さ
ん者は誰ぞや　この地滅されまた野のごとく焚れて過ぐる者なきにいたりしは
何故ぞ　13 エホバいいたもう　是彼ら我その前に立てしところの律法をすて我声
をきかず　之に従わざるによりてなり　14 彼らはその心の剛愎なるとその列祖た
ちがおのれに教えしバアルとに従えり　15 この故に万軍のエホバ、イスラエル

の神かくいいたもう 視よわれ彼等すなわち斯民に茵蔯を食わせ毒なる水を飲ませ 16彼らもその先祖たちもしらざりし国人のうちに彼らを散らし また彼らを滅し尽すまで其後に剣をつかわさん

17万軍のエホバかくいいたもう 汝らよく考え哭婦をよびきたれ 又人を遣して智き婦をまねけよ 18彼らは速かにきたりて我儕のために哭哀しみ我儕の目に涙をこぼさせ 我儕の目蓋より水を溢れしめん 19シオンより 哀の声きこゆ 云く嗚呼われら滅され我ら痛く 辱 めらる 我らは其地を去り 彼らはわが住家を毀ちたり 20婦 たちよ エホバの言をきけ 汝らの耳に其口の言をいれよ 汝らの女に哭くことを教え おのおのその隣に 哀 の歌を教うべし 21そは死のぼりてわれらの窓よりいり 我らの殿舎に入り 外にある諸子を絶やし街にある壮年を殺さんとすればなり 22エホバかくいえりと汝云うべし 人の 屍 は糞土のごとく田野に堕ちん また収穫者のうしろに残りて斂めずにある把のごとくならんと

23エホバかくいいたもう 智慧ある者はその智慧に誇る勿れ 力ある者は其力に誇るなかれ 富 者はその富に誇ること勿れ 24誇る者はこれをもて誇るべし 即ち明哲して我を識る事とわがエホバにして地に仁恵と公道と公義とを行う者なるを知る事是なり 我これらを悦ぶなりとエホバいいたもう

25 26エホバいいたまいけるは 視よわれすべて陽の皮に割礼をうけたる者すなわちエジプトとユダとエドムとアンモンの子孫とモアブと野におりてその鬢を剃る者とを罰する日きたらん そはすべて異邦人は割礼をうけず またイスラエルの家も心に割礼をうけざればなり

【「涙」の出てくる聖句引用】

「2エホバよわれを憐みたまえ われ萎みおとろうなり エホバよ我を医したまえ わが骨わななきふるう 3わが霊魂さえも甚くふるいわななく エホバよかくて幾何時をへたもうや 4エホバよ帰りたまえ わがたましひを救いたまえ なんじの仁慈の故をもて我をたすけたまえ……6われ歎息にてつかれたり 我よなよな床をただよわせ涙をもてわが衾をひたせり 7わが目うれえによりておとろえ もろもろの仇ゆえに老いぬ 8なんじら邪曲をおこなう者ことごとく我をはなれよ エホバはわが泣くこえをききたまいたり 9エホバわが懇求をききたまえり エホバわが祈りをうけたまわん」（詩篇６・２～９）

「12ああエホバよねがわくはわが祈をきき わが號呼に耳をかたぶけたまえ わが涙をみて默したもうなかれ われはなんじに寄る旅客すべてわが列祖のごとく宿れるものなり」（詩篇39・12）

「1ああ神よ 鹿の渓水をしたい喘ぐがごとく わが霊魂もなんじをしたいあえぐなり 2わがたましひは渇けるごとくに神をしたう 活神をぞしたう 何れのときにか我ゆきて神のみまえにいでん 3かれらが終日われにむかいて なんじの神はいずくにありやとののしる間はただわが涙のみ昼夜そそぎてわが糧なりき ……10わが骨もくだくるばかりにわが敵はひねもす我にむかいて なんじの神はいずくにありやといいののしりつつ我をそしれり」（詩篇42・1～10）

「8汝わがあまたたびの流離をかぞえたまえり なんじの革嚢にわが涙をたくわえたまえ こは皆なんじの冊にしるしあるにあらずや ……13汝わがたましひを死よりすくいたまえばなり なんじ我をたおさじとわが足をまもり 生命の光のうちにて神のまえに我をあゆませ給いしにあらずや」（詩篇56・8～13）

「4ばんぐんの神エホバよ なんじその民の祈にむかいて何のときまで怒りたもうや 5汝かれらになみだの糧をくらわせ 涙を量器にみちみつるほどあたえて飲ましめ給えり」（詩篇80・4～5）

「5わが歎息のこえによりてわが骨はわが肉につく…… 7われは醒てねぶらず ただ友なくして屋蓋におる雀のごとくなれり……9われは糧をくらうごとくに灰をくらい わが飲ものには涙をまじえたり 10こは皆なんじの怒りと忿恚とによりてなり なんじ我をもたげてなげすて給えり」（詩篇102・5～10）

「8汝はわがたましひを死より わが目をなみだより わが足を顛蹶よりたすけいだしたまいき」（詩篇116・8）

「4エホバよ願くはわれらの俘囚をみなみの川のごとくに帰したまえ 5涙とともに播くものは歓喜とともに穫らん 6その人は種をたずさえ涙をながしていでゆけど 禾束をたずさえ喜びてかえりきたらん」（詩篇126・4～6）

「8とこしえまで死を呑みたまわん 主エホバはすべての面より涙をぬぐい 全地のうえよりその民の凌辱をのぞき給わん これはエホバの語りたまえるなり」（イザヤ25・8）

「14我いう『わが主よ、なんじ知れり』かれ言う『かれらは大なる患難より出できたり、羔羊の血に己が衣を洗いて白くしたる者なり。15この故に神の御座の前にありて、昼も夜もその聖所にて神に事う。御座に坐したもう者は彼らの上に幕屋を張り給うべし。16彼らは重ねて飢えず、重ねて渇かず、日も熱も彼らを侵すことなし。17御座の前にいます羔羊は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭い給うべければなり』」（黙示録7・14～17）

「4かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん。今よりのち死もなく、悲歎も、號叫も、苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり』」（黙示録

21・4）

●背神、偶像崇拝、社会的不倫と乱れ

エレミヤ記9章の始めの方は、本当は8章18節から9章1節が一段落なんです。

1ああ我わが首を水となし我目を涙の泉となすことをえんものを　我民の女の殺されたる者の為に昼夜哭かん

これは8章の18節の、

18嗚呼われ憂う　いかにして慰藉をえんや　我衷の心悩む」（エレミヤ8・18）

という句に始まって、今の句に終わっている、非常に深刻な悲痛を訴えている。21節もそうです。

21我民の女の傷によりて我も傷み且悲しむ」（エレミヤ8・21）

という。それから、

2嗚呼われ曠野に旅人の寓所をえんものを　我民を離れてさりゆかん　彼らはみな姦淫するもの悖れる者の族なればなり　3彼らは弓を援くがごとく其舌をもて偽をいだす　彼らは此地において真実のために強からず　悪より悪にすすみまた我を知ざるなりと　エホバいいたもう

イスラエルの民が宗教的な姦淫を犯して、あだし神々を拝み、かつまた社会生活も乱れている。いわゆる邪教的な要素が大いにあるわけです。それで、

「悪より悪にすすみまた我を知ざるなり」

という。

4汝らおのおの其隣に心せよ　何の兄弟をも信ずる勿れ　兄弟はみな欺きをなし　隣はみな讒りまわればなり

もう人間の関係に信頼がなくなってしまった。

「人を見れば狼と思え」

というラテンの諺がありますけれども、もうそのような事態では――国際関係には大いにそういったような面がある――信用がおけない。しょっちゅうスパイでもってお互いに探り合いをやっている。そういう意味においては、国家というものも随分困った存在です。国際関係のそういったことも結局、煮詰めてみれば、人間個人の問題に最後にはなるわけです。とにかく、人間界というものはもう問題だらけです。

「義人なし、一人だになし」

と、パウロが本当に言う通りなので、モーセの十誡またキリストの山上の垂訓に及第する人は一人もいない。そのことを見ても、人間の思想や理性や一切のことをもってしても、どうにもならない。だから、万人は宗教を要するんです。その一番必要とするものをいい加減にしているのが現状ですから、どうにもならないことははっきりしている。

「**汝らおのおの其隣に心せよ**」

なんて、「しょっちゅう注意せよ」なんてなことでは、おちおち眠れもしないわけです。しかし、そういう現状であるので、その通りにこのエレミヤは言っているわけです。ユダの国の背神、偶像崇拝、社会的な不倫と乱れの現状です。

5 **彼らはおのおの其隣を欺き　かつ真実をいわず　其舌に謊をかたることを教え悪をなすに労る　6 汝の住居は詭譎の中にあり　彼らは詭譎のために我を識ることをいなめりとエホバいいたもう**

心と口とがいつもちぐはぐになっているのが、この「詭譎」というやつ。エレミヤの言葉の中にも、

「**心ほど悪いものはない**」

というような言葉がどこかに出てきました。「心ほど大事なものはない」と同じように。

「**人の心腸を見給う万軍のエホバよ**」

という言い方でね。要するに、人間の中には天国と地獄が共在しているわけです。天の使者と、それから悪魔の使者が、両方ともいるわけだ。金色の天の使いはいくらいてもいいですが、黒い姿をした悪魔の使いは追い出さなくはいかん。こないだ、私は中学・高等学校の生徒にそのことを語ってやった。

7 **故に万軍のエホバかくいいたまえり　視よ我かれらを鎔し試むべし　われ我民の女の事を如何になすべきや**

火で溶かす。「民の女」と言っているから、本当にこれは女性のことです。「シオンの女」というときには、「シオンの市民」という意味ですけれども。

8 **彼らの舌は殺す矢のごとし　かれら詭をいう　また其口をもて隣におだやかにかたれども　其心の中には害をはかるなり**

まぁその通りなことを言っているわけです。

9 **エホバいいたもう　我これらの事のために彼らを罰せざらんや　我心はかくのごとき民に仇を復さざらんや**

10 **われ山のために泣き咷び野の牧場のために悲しむ**

やがて審判はくるぞと。人間界がそこなわれてくると、自然もそこなわれる。

これらは焚れて過ぐる人なし　またここに牛羊の声をきかず　天空の鳥も獣も皆逃てさりぬ

自然界も乱されてしまう。その当時の公害現象。これは戦禍にあう面もあるけれども。

11 **われエルサレムを邱墟とし山犬の巣となさん　またユダの諸の邑々を荒して住む人なからしめん**

そうなってしまうぞと。ユダも荒廃して荒野となってしまう。

12 **智慧ありてこの事を暁る人は誰ぞや**

「この事」というのは、スクテア人が北からやって来ることをしきりに言っているわけです。

エホバの口の言を受けてこれを示さん者は誰ぞや　この地滅されまた野のごとく焚(やか)れて過ぐる者なきにいたりしは何故ぞ　13 **エホバいいたもう　是彼ら我その前に立てしところの律法をすて我声をきかず　之に従わざるによりてなり**　14 **彼らはその心の剛愎(かたくな)なるとその列祖(せんぞ)たちがおのれに教えしバアルとに従えり**

バアルのあだし神ですね、偶像。よほど偶像教がはびこっていたと見えて、しきりに預言者たちがそのことを言っている。

15 **この故に万軍のエホバ、イスラエルの神かくいいたもう　視よわれ彼等すなわち斯民に茵蓯(いんちん)を食(くら)わせ**

にがよもぎですね。

毒なる水を飲ませ　16 **彼らもその先祖たちもしらざりし国人のうちに彼らを散らし　また彼らを滅し尽すまで其後に剣をつかわさん**

と、非常に烈しいことが言われている。徹底的な審きです。日本のいろんな現状に対してこれだけの烈しいことを言ったら、もう大変なことになるでしょうね。しかし、エレミヤは恐れなくそれを言っているわけです。

「日本は亡びてしまぞ」

というようなことでね。

17 **万軍のエホバかくいいたもう　汝らよく考え哭婦(なきおんな)をよびきたれ**

そういう、特に悲しみの時に泣く女がいる。職業的といってもおかしいけれども、そういう種類の婦人がいるわけです。

又人を遣(つかわ)して智(かしこ)き婦(おんな)をまねけよ

「智き婦」という妙な言い方ですが、非常に情感の深い、泣くことのうまい婦人。（笑）

18 **彼らは速(すみや)かにきたりて我儕(われら)のために哭哀(なきかな)しみ我儕の目に涙をこぼさせ　我儕の目蓋(まぶた)より水を溢れしめん**

そういうように、まぁ半分、エレミヤは皮肉ってこう言っているわけです。「それほどまでにダメなのに、お前たちは平気な顔しているか」というわけです。

19 **シオンより哀(かなしみ)の声きこゆ　云く嗚呼(ああ)われら滅され我ら痛く辱(はずかし)めらる　我らは其地を去り　彼らはわが住家(すみか)を毀(こぼ)ちたり**　20 **婦(おんな)たちよ　エホバの言をきけ　汝らの耳に其口の言をいれよ　汝らの女に哭(な)くことを教え　おのおのその隣に哀(かなしみ)の歌を教うべし**

今は本当に現実の奥を認識して、悲しみのときである、というわけです。

21 **そは死のぼりてわれらの窓よりいり**

面白い言い方をしているね。

我らの殿舎(やかた)に入り　外にある諸子(こどもら)を絶やし　街(ちまた)にある壮年(わかきもの)を殺さんとすればな

り 22 エホバかくいえりと汝云うべし 人の屍は糞土のごとく田野に堕ちん また収穫者のうしろに残りて斂めずにある把のごとくならんと

エレミヤにはいろいろな光景が見えてしまうわけです。その通りの事を言っている。預言的な言葉です。

そこでちょっと方向が変わりまして、

23 エホバかくいいたもう 智慧ある者はその智慧に誇る勿れ

これは前とは全然関係はないんです。預言書というのは後からやはり編纂した面がありますから、編纂者が、これはもっとずっと後の方にきていいはずのものが、ここのところに入ってきたらしい。

力ある者は其力に誇るなかれ 富者はその富に誇ること勿れ 24 誇る者はこれをもて誇るべし 即ち明哲して我を識る事と

「我」というのは神さまです。

わがエホバにして地に仁恵と公道と公義とを行う者なるを知る事是なり 我これらを悦ぶなりとエホバいいたもう

神さまを本当に知るということだけを誇って、あとは自分の側の智慧も力も富も、そんなものは誇ってもむなしいというわけです。

25 26 エホバいいたまいけるは 視よわれすべて割礼なきに割礼ある者

「割礼なきに割礼ある者」という言い方、「心に割礼がないのにただ外側の割礼ある者」ということです。

すなわちエジプトとユダとエドムとアンモンの子孫とモアブと野におりてその鬢を剃る者とを罰する日きたらん

鬢は剃ってはいけないわけです。

そはすべて異邦人は割礼をうけず またイスラエルの家も心に割礼をうけざればなり

ここははっきりそのように書いてあるね。旧約の割礼というのは、新約でいうと洗礼のことです。

「心に洗礼を受けていないで、ただ形式的な洗礼を受けてもどうにならん」と。まぁ、一応そういうことです。

●涙の泉

今日の主題は、ただこの第1節にある。

「ああわが首 水ならんには 我が目 涙の泉ならんや」

コンユンクティーフ〔接続法、仮定法〕な言い方です。「涙の泉となりたいものだ」と。それで「涙の泉」という題にした。それはさっきの18節からずっときている内容の結論みた

いなこと。国が乱れ、そして悲惨なことが行われている。とても見るに耐えられない。

我民(わが)の女の殺されたる者の為に昼夜哭(なげ)かん　2 嗚呼われ曠野(あらの)に旅人の寓所(やどりどころ)を　えんものを

自分はもうこんな所にはいたくない。曠野に行ってしまいたいと。

我民を離れてさりゆかん

エレミヤもそんなことまで言わざるを得ないような気持である。内村鑑三先生が、

「もう日本には愛想をつかしたと言ってくれ」

なんて、死の少し前に言われたそうです。

少し他の箇所に先ず触れておきましょう。詩篇の6篇、これは私は「涙」という題でいつか解説を書いたことがある。6節、

「6 **われ歎息(なげき)にてつかれたり　我よなよな床をただよわせ涙をもてわが衾(ふすま)をひたせり**

夜寝ていてどうにもならん。涙が流れて、しとねを浸してしまったと。

7 **わが目うれえによりておとろえ　もろもろの仇ゆえに老いぬ　8 なんじら邪曲(よこしま)をおこなう者ことごとく我をはなれよ　エホバはわが泣くこえをききたまいたり　9 エホバわが懇求(ねがい)をききたまえり　エホバわが祈りをうけたまわん**」（詩篇6・6～9）

「たまわん」ではなくて、「たまえり」と訳したい。2節に、

「2 **エホバよわれを憐みたまえ　われ萎(しぼ)みおとろうなり　エホバよ我を医(いや)したまえ**

とある。これは何か深刻な病気にも、あるいは心の病気にもなって、

わが骨わななきふるう

心身がひどいことになってしまっているらしい。

3 **わが霊魂(たましひ)さえも甚(いた)くふるいわななく　エホバよかくて幾何時(いくそのとき)をへたもうや**

4 **エホバよ帰りたまえ　わがたましひを救いたまえ　なんじの仁慈(いつくしみ)の故をもて我をたすけたまえ**」（詩篇6・2～4）

4節は非常に力強い言葉です。本願によりすがっている。

「エホバよ、帰り給え」

と。私が帰るのではない。

「エホバよ、あなたがこっちを向いてください。私があなたの方に向くのではない。もう私はあなたの方へ向く勇気もない」

と。もう平伏してしまって、どうにもならんと。人間というのは、どうにもならんときがあるらしいですよ。

「エホバよ、帰り給え。あなたがこっちに向いていただかないと」

といって、まぁ小さい子がワンワン泣いていると、お母さんが帰ってくるわけです、「母よ、帰りたまえ」というわけで。

「わがたましひを救いたまえ なんじの仁慈の故をもて」

と。絶対恩寵です。

「こっち側のどうかではない。あなたの愛しみの故をもて私を助けてください。こちら側の状態がどうのこうのということではない。もうそれはいくらやってもダメなんですから」

というわけです。非常にこの詩篇６篇は、私は自分でも「涙」という題で書いたから、忘れられない。

〔註：著者は１９３５年頃から「詩篇研究」を『旧約知識』誌に連載した。「曠野の愛社」刊『詩篇』（１９５８年３月刊）には詩篇１～41篇までの翻訳と解説が再録されている。なお、著作集第４巻『詩篇珠玉集』（１９８０年刊）にはこのときの解説を土台にした詩篇第６篇「涙」が収録されている〕。

それから、詩篇39篇の12節、

「12**ああエホバよねがわくはわが祈をききわが號呼に耳をかたぶけたまえわが涙をみて默したもうなかれ われはなんじに寄る旅客すべてわが列祖のごとく宿れるものなり**」（**詩篇39・12**）

「旅客」「宿れるもの」という言い方です。この世では旅人であると。

それから、42篇。これは有名なところです。

「1**ああ神よ 鹿の渓水をしたい喘ぐがごとく わが霊魂もなんじをしたいあえぐなり 2わがたましひは渇けるごとくに神をしたう 活神をぞしたう 何れのときにか我ゆきて神のみまえにいでん 3かれらが終日われにむかいて なんじの神はいずくにありやとののしる間はただわが涙のみ昼夜そそぎてわが糧なりき**」（**詩篇42・1～3**）

涙が自分の糧であった。彼らは、

「あいつの神さまはどこにいるのか!?」

と言って嘲っているというわけです。渇いた鹿が谷川の水を慕いあえぐ如く、私はあなたに慕いあえいでいる。彼らは嘲っているが、そのために涙が昼夜流れると。10節にも、

「10**わが骨もくだくるばかりにわが敵はひねもす我にむかいて なんじの神はいずくにありやといいののしりつつ我をそしれり**」（**詩篇42・10**）

と。「わが骨もくだくるばかり」なんていう言葉がある。非常に表現が強烈です。私たちも、聖書だからただ読んでいるけれども、これが普通の文学だったらね。まぁ旧約聖書の表現くらい非常にドラマチックな、また具体的な表現はそうはないくらいです。いろんな文学のむしろやはり源泉になっていると言ってもいいくらいです。文学といっても、いい加減

な文学のことを言っているわけではない。

それから、詩篇56篇の8節。これは手島君の雑誌に書いた〔註：「生命の光」第9号、１９４９年7月、詩篇56「涙の革袋」〕。そこに「涙の革袋」という言葉がある。

「8**汝わがあまたたびの流離(さすらい)をかぞえたまえり　なんじの革嚢(かわぶくろ)にわが涙をたくわえたまえ　こは皆なんじの冊(ふみ)にしるしあるにあらずや**」（**詩篇56・8**）

「革嚢(かわぶくろ)」というのは、ああいう砂漠では、革袋の中に水を蓄えておく。そして革袋から飲む。非常に水は貴重ですから。皮袋に、水ではなくて涙を蓄えてくださいと。何か深刻なことにでつくわした。56篇も相当深刻な詩篇ですね。一番終わり方に、「生命の光」という言葉がある。

「13**汝わがたましひを死よりすくいたまえばなり　なんじ我をたおさじとわが足をまもり　生命(いのち)の光のうちにて神のまえに我をあゆませ給いしにあらずや**」（**詩篇56・13**）

旧約の中にも時々、新約的な希望の光がきらめいていますけれども、まだ本当のところまでには行ってない。

詩篇の80篇5節。

「4**ばんぐんの神エホバよ　なんじその民の祈にむかいて何(いずれ)のときまで怒りたもうや　5汝かれらになみだの糧をくらわせ　涙を量器(ます)にみちみつるほどあたえて飲ましめ給えり**」（**詩篇80・4～5**）

神さまの怒りというものは、いろんな事態に対して出てくるので、彼らも苦しむわけだ。

それから、非常に悲痛な詩篇は102篇です。9節、

「9**われは糧をくらうごとくに灰をくらい　わが飲(のみ)ものには涙をまじえたり**」（**詩篇102・9**）

こういう句は、ゲーテがあの詩をうたう時におそらく想いだした句だと思う。あるいはこういう句があの『ヴィルヘルムマイスター』の例の「ミニオン」のところに出てくる。

「自分のパンを、御飯を涙を交えて食べたことのない人、悩みに満ちた夜な夜なを自分のベッドの上で泣きながら坐っていたことのない人、その人はあなた方天の諸々の力を知ることはない」

「そういった悲しみに遭って初めて天来の力というものを感ずるのだ」

と、そういう句です。これは『ヴィルヘルムマイスター』の第二巻の13章に出てくるところの言葉です。ゲーテの文章を見ていると、本当に魅せられてしまう。102篇の9節は、正にゲーテのこの詩を想いだすような言葉です。むしろ、ゲーテの詩の元にこれがなっていたと思う。

「9**われは糧をくらうごとくに灰をくらい　わが飲(のみ)ものには涙をまじえたり**」（**詩**

篇102・9）

と。これは悩みの詩篇です。

「5**わが歎息のこえによりてわが骨はわが肉につく…… 7われ醒てねぶらずた**
だ友なくして屋蓋におる雀のごとくなれり…… 10こは皆なんじの怒りと
忿恚とによりてなり なんじ我をもたげてなげすて給えり」（**詩篇102・5～10**）

この句は忘れがたい句です。藤井先生が奥さんを亡くなして、もう天地晦冥、混沌としてしまった。そして、詩篇を1篇からずーっと読んでいた。102篇のこの10節にきて、

「**なんじ我をもたげてなげすて給えり**」

という一句にきて、

「自分の今の心境を本当にこの句が表している」

と、藤井先生は言われた。即ち、奥さんを亡くなして、彼は本当に神さまに投げ捨てられた気持をこの句において見出したわけです。

それから、詩篇116篇の8節、

「8**汝はわがたましひを死より わが目をなみだより わが足を顛蹶よりたすけ**
いだしたまいき」（**詩篇116・8**）

これは非常に慰め深い言葉です。

今、私はただこうやって句を拾いだしていますけれども、是非その全体の詩篇を読んでみてください。この句は一体、詩篇のどういう所に位置して、どういう味を持っているかということは、ただ一つの句を見たのでは分からない。そういうようにして勉強してください。

カール・ヒルティはいろんな論説を書きましたが、非常に聖書の引用をたくさんやっている。ヒルティはいい加減にあれを引用しているのではないので、ヒルティを本当に読もうと思ったら、あの聖句の引用を丹念に調べて読むと、本当の味が出てくる。そうやって読む人はほとんどないといっていいくらいでしょうけれども。何のためにヒルティはあんなに引用しているかということは、それでわかるわけですから。

それから、有名な詩篇126篇。涙を流して種を蒔いたという。

「4**エホバよ願くはわれらの俘囚をみなみの川のごとくに帰したまえ**

これはバビロニヤ捕囚のことです。

5**涙とともに播くものは歓喜とともに穫らん 6その人は種をたずさえ涙をな**
がしていでゆけど 禾束をたずさえ喜びてかえりきたらん」（**詩篇126・4～6**）

という。「涙を通して歓喜へ」というわけだ。詩篇126篇はこれも私はかつて解説して書きました。私の兄貴の記念号のところに。

〔註：『曠野の愛』No.8、9、1951年9、10月号―小池政美三十周年記念号―詩篇第126「涙を流して出で往けり」〕

まぁ大体、詩篇で「涙」のことが出てくるのは、この8篇でしょうね。それから、もう少し行きましょう。イザヤ書の25章、これは慰めの言葉です。

「8**とこしえまで死を呑みたまわん 主エホバはすべての面より涙をぬぐい 全地のうえよりその民の凌辱をのぞき給わん これはエホバの語りたまえるなり**」（イザヤ25・8）

「涙をぬぐう」という言葉。これは、旧約の終末的な預言に応ずるものは、やはり新約の黙示録です。黙示録7章の終わりの方は非常に私の大好きなところです。14節から。7章の14節というのは、藤井先生の召天の日が7月14日で、そこから忘れられない。この所は私は先生の告別式の時にも多分読んだつもりです。

「14**我いう『わが主よ、なんじ知れり』かれ言う『かれらは大なる患難より出できたり、羔羊の血に己が衣を洗いて白くしたる者なり。**

十字架の血でね。

15**この故に神の御座の前にありて、昼も夜もその聖所にて神に事う。御座に坐したもう者は彼らの上に幕屋を張り給うべし。16彼らは重ねて飢えず、重ねて渇かず、日も熱も彼らを侵すことなし。**「17**御座の前にいます羔羊は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭い給うべければなり』**」（黙示録7・14～17）

同じく黙示録の21章4節、

「4**かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん。今よりのち死もなく、悲歎も、號叫も、苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり』**」（黙示録21・4）

これはもう完全に天国的な情景です。

なお、詩篇の84篇の6節には、「バーカーの谷」というのは初め間違えて「涙の谷」と訳したのですが、「涙」という字と「バーカー」という地名とが似ているものだから間違えた。ルッターが「悩みの谷」と訳している。

「人生は悩みの谷である」

ということで、よく例えて言われるところです。新しい訳では多分、「バーカーの谷」と書いてある。「バーカー」というのは、そういう乾いた所に生える木なんです。それで、

「乾いた谷も潤いたる所となす」

というようなわけで書いてある。

●「盲人の叫び」

皆さんは、まだ人生はそうたくさん通っていらっしゃらなくても、やはりそれぞれ一人びとり何らかの涙がおありだと思う。地上でもって涙のない人は恐らくないと思う。

私の母〔小池光子1869～1957〕が失明したとき、私はもう正直、やりきれなかったです。時々夜、窒息しそうな気持になった。ちょっと私事で恐縮ですけれども。私の母は五人の子供たち〔政美、龍二、富士子、（三郎）、辰雄、愛子〕を一人で育てた。父〔小池政吉1856～1908〕が早く亡くなったから。一番上の兄貴〔小池政美1895～1921〕は非常に優秀で、大学を卒業して、本当はロンドンに行くはずだったのが、北京に遣られたのが運命の尽きで、北京で腸チフスで仆れた。これは母にとっては、長年の苦労が一朝にして水泡に帰したわけです。今までの過労と心痛で失明してしまった。帰りの黄海の上で。遺骨を携えて失明して帰って来た母を私は見て、どうにもならなかった。私の経験した一番深刻な時はそのときでした。それから、88歳まで38年間、失明生活を送ったわけです。

ついでにちょっと読ましていただきますが、実は『無者キリスト』の「破れ」という項目の第三番目に「盲人の叫び」という、マルコ伝10章46節からのバル・テマイの話です。キリストがやって来た時に、このバル・テマイは「見えたい！」と叫んだわけです。

「盲人の叫び」（マルコ10・46～52、マタイ20・29～34、ルカ18・35～43）

「ダビデの子よ！」

この記事は共観福音書に共通のものだが、マルコ福音書を基準として見ていくこととする。イエスがエルサレムに向っての最後の旅路で、ヨルダンの下流、海面下２４０米、世界最低の地位にあるエリコという町を今しがた出て来たばかりの出来ごとである。

イエスを先頭にして弟子たちがこれに従い、ガリラヤから伴いて来た女たちも少なくない。それに「大いなる群衆」が延々長蛇をなしていた。テマイの子、すなわちバル・テマイと通称されていた「盲目の乞食」が路のほとりに坐っていた。マタイ福音書ではもう一人いたように記されてある。もちろん物乞いをしていたことはルカの伝えるとおりであろう。大群衆が通りかかるのを耳ざとく知って、

「えらく賑かな行列が来たようだが、一体何だね」

といったような問をそこらの人に向って発した。

「あれはナザレのイエスの行列だよ」

という答が返って来た。これを聞くや、盲人は猛然と声を張りあげて、

「ダビデの子、イエス様！　私をあわれんでください！」

と叫んだ。この叫びはイエスに自身を全的にぶちあてている。信仰そのものである。

「ダビデの子よ！」という呼びかけは、相手を「メシヤよ！」と呼ぶのと同じことで、メシヤはユダヤの王者を意味し、ローマ側にとっては、ローマ帝国に対する政治的反逆者を暗に意味することになる。そのようなわけで、「ダビデの子」は危険な表現であるから、群衆はこのバル・テマイを禁めて黙らせようとしたのも無理はない。ところが盲人はそんなことにはおかまいなく、ますます叫んだ。

「ダビデの子よ！　私を憫(あわれ)んでください！」
声は一段と強くなった。その全身をふりしぼった声を耳にしたイエスはちょっと立ち止まって、
「あの者を呼んでやれ！」
と言った。人々はそこで盲人を呼んでいった、
「安心しなさい。お起ち！　あんたを呼んでなさるよ！」
と。
上衣を脱ぎ捨て
バル・テマイは、上衣を脱ぎ捨て、躍りあがって、声の方に向って勇躍突進して往った。　盲人のこの劇的な動作、
「上衣を脱ぎ捨て、躍りあがって」
この一句にこの盲人の全存在が文字通り躍動している。これが信仰というものであるのだ。信即行をこの盲人の姿に見る。信仰とは心理状態ではない。信仰とは全実存的な動きそのものである。
近づいて来た盲人に対してイエスは、
「何をしてもらいたいのだね」
と問うた。勿論問うまでもなくイエスにはわかっていることではあったが。
「見えるようになりたい。先生、見えるようになりたいのです！」
と答えた。「見えるようになりたい！」地上の不幸で、目が見えないほどせつないことがあろうか。
私も失明した母をもっていた。私事にわたって恐縮であるが、はやくも夫に死別した彼女は、女の細腕で五人の子女を育ててくれた。多年に亘る大変な労苦であった。長兄政美が、大学を卒業して二年目、北京の日本公使館へ赴任した。一年も経たぬうちに彼の地で悪性腸チフスで仆れた。母はその遺骨を抱いての帰途、長年の過労と長男の急死のための失望悲嘆のあまり、黄海の船上で失明してしまった。時に母は五十歳であった。爾後八八歳まで三八年間の失明生活をおくったが、失明当初は自殺したいと思ったこともあった由を、後になって開いた。「見えるようになりたい！」は私の母にとっても心の奥底の沈黙の叫びであったに相違ない。それを私に平素一度も洩らさなかった母の忍耐を察して私は時折断腸の想いであった。肉体の破れの中で失明は最も深刻なものであろう。
失明詩人ミルトンの『サムソン・アゴニステス』の詩句を引用してみよう。
……だが、何はさておき、
失明、これをこそ私は最も訴える。
諸々の敵中で目が見えないとは！

鎖や土牢や乞食や老衰よりも悪い仕未だ！
神のいや先のわざなる光が私には消え失せている。
……
おお暗黒、暗黒、暗黒。真昼の光明のただ中でも
取りかえしのつかぬ暗さよ、全き日蝕よ、
そこには真昼の望みが全くない！

（ミルトン『死闘者サムソン』、私訳）

更に『パラダイス・ロスト』の中にもこういう詩句がある。

……年ごとに
季節は帰れど、私には帰らない、
日も、夕（ゆうべ）、朝（あした）のうましき接近（ちかづき）も
または春の花、夏の薔薇の眺めも
羊牛の群も、人のたふとき顔も。
むしろただ雲と消えやらぬ暗黒とに
囲まれ、人々の楽しき途より
断たれ、美しき知識の書（ふみ）に代へて
私には掻き消されし自然の業（わざ）の
涯（はてし）もなき白紙を供へられ、かくて
智慧は一つの門（かど）に閉（し）めいだされて。
さればいよいよ寧ろ汝、天の光よ、
内に輝け、心の能力（ちから）すべてを
照らせ。そこに眼を植え、あらゆる霧を
そこより掃ひきよめよ、そは人の目に
見えぬものを私は見また告ぐべく。

（ミルトン『楽園喪失』第3篇40～55行、藤井武訳）

ミルトンは失明詩人だけれども、見えない目で本当のものを見ていた。ベートーヴェンはつんぼの作曲家。これも聞こえない耳で本当の音を聞いていた。

イエスはこの深刻な「破れ」そのものたる失明のバル・テマイの悲願をハタと受けとめて、

「往け！　おまえの信仰がおまえを救った。」

と言った。何たる権威！　何たる力ある愛！　盲人に向って直ちに「往け！」とは！

間髪を容れず、言下に開眼し、この盲人は歩き出し、イエスの行列に加わった。

「おまえの信仰がおまえを救った」

というイエスの発言は、その他の場合にもしばしば聞くところであるが、これは誤解

してはならない。我々の信仰が何ものかで、その信仰の力が救をもたらした、などと解してはならない。

「おまえがこんなにも自分を投げ出して全的に神を、私を信じたので、私を通してはたらき給う神の力がおまえを救ったのだ」

という内実である。

跛者も聾者も唖者も癩病人も、当時は病名が定かでなかった諸々の病者も。――その中には癌患者もあったろう――実に死者をもよみがえらせたイエス。実に「すべての罪をゆるし、すべての病を癒す」実存者イエス。そのイエスは自分を何ものとも思っていなかった。父なる神を一切としていた！」（『無者キリスト』より）

●天涙は霊光を受けて虹と光る

そういう文章ですけれども。失恋もありましょうし、あるいは事業の失敗もあろうし、生活問題の涙もあろうし。この頃よく新聞に出てきますね、一家心中とか。いろいろな深刻な涙がそれぞれあるわけです。地上は要するに涙の乾かない現実。

「涙が乾かない」といえば、日蓮の句に、

「鳥と虫とは鳴けども涙おちず。日蓮は泣かねども涙ひまなし。（この涙世間のことには非ず。ただひとえに法華経の故なり。若ししからば甘露の涙とも云っつべし。）」（諸法実相抄）

という。日蓮は泣かないけれども涙が乾かないと。本当の終末の新天新地、神の国がくるという、悟りの道を開いたのも、要するに、人間界のこの涙を如何せんという、この問題です。我々は、運命環境を変えて、相対的に涙から多少逃れることもあるでしょう。けれども、それは相対的なことであって、またやってくる。晴れたと思うと、また雲がきて雨が降って風が吹いてと。これがもう自然界と同じなんだよね、この人生も。だから、雨が降ろうが、風が吹こうが、どうあろうとも、涙があっても、その奥に本当のこれに打ち勝つ笑いを有つ世界、歓喜を有つ世界。これをもたなかったら、いくら深刻に体験してみたって、どうにもならない。ただ人生を深刻がったってしょうがない。深刻な体験は、もちろん避けることはないけれども、その奥にそいつを貫いて突き抜けたものを私たちがもたなければ、本当に人の涙をぬぐうこともできないし、共感することもできないということになるわけです。

人間だから、躓いたり転んだり、申し訳ないこともいろいろありますけれども、しかし、本当の、同情しながら本当に慰めを与えるものは、人間のただ感情の慰めではない。これはやはり天来の力による。さっきゲーテが「天的な力」と言ったが、それはキリストの本願の力です。それはどうしても、御霊を受けないと、そこにこれない。単なる「我々の信仰」なんてなことではね。この聖霊は愛の霊ですから、

「愛は一切に勝つ」

という。この現実になお打ち勝っていく。また、相対的な現実を、涙の現実を転換する力もあるでしょう。ある時は、転換することもできないでしょう。しかし、できないでも、なお奥でもってそれを支え、それを突き破るところのものは、絶対に聖霊の事態です。

「幸いなるかな、悲しむ者、その人は慰めを得ん」

という。この慰めはキリストから来るので、人からくる慰めではない。キリストの本当の「ミットライデン」（同情、共苦）というものは「ミットフロイデ」（共歓）にもっていくわけです。悲しみを共にしながら、歓びを共にするところへ持っていく。これは運命環境の変化の如何にかかわらず、その現実を即有（も）つことです。

私は、それで、虹が好きなんです。虹は即ち水滴、涙、天涙だ。天から降ってくる涙。しかしながら、この光を、霊光を受けると――普通の太陽の光で結構ですが――我々の中の涙、私たちの中にある水滴、涙に霊光、光がくると、これが虹と光る。

「ああ、虹は素晴らしいなぁ」

と言う。あのワーズワースの詩は、本当に美わしい虹をただ幼心（おさなごころ）に見て、この幼心はいつまでも失いたくないという。

〔註：「虹」（Rainbow ― W. Wordsworth 1770～1850）：「わが胸は欣び躍る、大空に虹をし見れば。人生の曙に然かりき、成人の今も然かあり、老年の暮も然かあれ。然らずばわれ死なまほし！　幼児は成人の父ぞ。魂極る生涯の日々を結びてよ生来の虔心。」（小池訳、著作集８『詩歌集』より）〕

あのワーズワースの詩は単純にそれできているが、我々は自然の虹ではなくて、福音的な意味における虹。涙の現実にこそ最も美わしいものが輝く。地上において涙、苦しみのないところには、本ものは起きてこない。ここでもってただ「めでたし、めでたし」なんてやっていたら、それは浮いてしまって消えてしまう、霧のように。逆に、本当にそういった、とにかく、本当にこの地上を生きようとすると、必ずそういった苦しみ、涙をもつ。しかし、それはそこを通して神の光が美わしく光らんがためです。

どうぞ、そういうことでもって、逆境的な体験を全部、本当のプラスにしてください。

「なんとあの人は輝かしいだろう。あんなに苦難にあいながら、何も苦難も知らないような微笑みを持っているのだろう」

というのが、この虹の、虹的なひとです。そういうところに突き抜けなくては。

●聖霊の不思議な世界

私は、なんか不思議な人のことをちょっと読んだ。もう既に亡くなっている人ですけれども、山崎弁栄上人〔やまざき　べんねい（1859～1920）は明治・大正期に活躍した浄土教の僧侶〕という。この人は禅宗〔？〕の方の人らしい。この人が群馬県の高崎のあたりを――キリスト教的にいえば伝道ですね――布教していた。その時にやはり自分の宗派のお弟子さんで、

新潟県の柏崎にいる籠島咲子さんという――この上人の道は光明道というらしいね。この咲子さんという人がこの道を行こうと思うのだけれども、どうもダメなんだ。それで自分は自殺しようとした。自殺せんと思っているその事態を、この上人は如来のお告げを聞く。

「今、あの人は自殺しようとしている。お前は助けろ」

と。これはアナニヤにパウロのことを語ったあの事態と同じことです。そこで、その先が凄いんだよね。これはエゼキエルやなんかと同じで、分霊して――あるいは分身といってもいい。その上人はちゃんとそこの高崎に居るんですよ、居ながら――彼の霊は柏崎に行ってしまっている。そして、この籠島さんの枕辺に現れた。そして、

「仏思いの光明を、仏を思うところの光を失うな。胸に仏を種の如くに宿せ」

と、そういうような言葉を七回称えたという。そうしたら、彼女は忽然と悟りの世界に入って救われてしまった。そして、忽然と上人は消えてしまって、もとに戻る。

ちょうどピリポがパッと居なくなったね、あれ式なんだ。あれは本当なんだ。仏教の世界でも第一級の人になると、それくらいのことをやらかす。

この本を私は少し昨日読んでいたんだけれども。これは結局、「真我」の世界。真の我。真の我は相対的の我に絶しなくてはいかん。これが無の世界です。真我といおうが、宇宙我といおうが、言い方はどうだっていい。凡我といおうが。

要するに、使徒行伝の聖霊の世界なんです。あのペテロが乞食に向かって、

「我を見よ」

と言った時に、あの「我」は完全に自分というものが抜けている我です。即ち、完全にキリストの霊が内住している我ですから。

「わがうちなるものを汝に与える。イエス・キリストの名において汝は歩め」

と言ったら、生まれつきの跛者が立ってしまったではないですか。私たちは、そういった現実が「今できるとか、できないとか」という問題ではなくて、質的にそういった信仰の世界に入らなかったら、信仰なんていったってつまらないですよ。

「何だか知らんけれども楽でしょうがない」

というのは、多少その世界に入っているからです。自分なんてものは問題でなくなってしまったから。自分なんか問題にしていると、こだわるから、「さぁ、どうだ、こうだ」といって、「ダメな野郎」（自分）は躓いたり転んだりするよ。けれども、もうひとつ奥の「ダメでないもの」（キリストの霊）がいつも起き上がってくる。そして、どんな現実に向かっても決して生き詰まりはきたさない。救いあげていくというものは、この「真我」の世界です、この人の言葉をもっていうならば。

だから、本当の霊止（ひと）となるということはそうです。神霊が、キリストの霊が、如来の霊が止どまっている。いつも私が書く通り。こないだも、１４００人の中高の生徒に、私は黒板に大きく書いてやった。

「これを忘れるな。お前たちは、「ひと」というのは「霊止（ひと）」と書け。霊の止どまる者、神霊の止どまる者を霊止（ひと）と書く。こんな簡単な「人」という字は書くな。ちゃんと「霊止」と書いて「ひと」と読む。私は霊止（ひと）でなくては、人とは書けませんという自覚をもたなくては」

と。「何だこれは、何と読むのか？」と、みんなびっくりする。ところが、これは霊止（ひと）なんだ。即ち、仏教でいうならば、無量寿をもっているところの如来です。もう表現はどうでもいいですよ。最高の世界は非常に共通な世界をもっていますから。

話はちょっとズレるけれども、私が読んだ本からちょっと紹介すると、この人は――ある自然科学の本をある他の人が見ていた――そうしたら、じっとその本を見ていて、そして「わかった」と。そしたら、その自然科学の本の或る頁を開いて、「ここに何と書いてあるか？」と聞くと、スラスラとその内容を言ってしまう。これはおったまげた。中が読めてしまっているんです、霊的に。霊的でもって読めてしまう。まぁそれは大変な次元です。それを「大円鏡智」と書いてあったね。円の鏡の智慧。この智慧は本当のエピグノーシス、霊知だから、円形の鏡にみんな映ってしまうんだ、中味が霊の鏡に。霊の鏡に映ってしまうから、見えるんだよ、そんな字なんか見なくたって。そういう円鏡智の偉大なるもの、大円鏡智という、そういう境地だそうだ。大変な人がいたもんだと思ったね。ガイスト〔霊〕の世界は、これはもう極まりないですよ、正直。

●涙の泉は歓喜の泉に

ですから、どうぞ、皆さんは、とにかく祈りの世界では深くなることです。深くなるということは、要するに、自分をキリストの中に投げ入れることだけです。本当に私が無くなる世界です。もうそれはたまらんですね、そうなると。もうそれはたまらんです。それは夜、沈黙で。それはもう沈黙の祈りだよ、深い。叫ぶ必要はないよ、何も。沈黙の祈り。まだみんなワイワイ叫んでいるうちは、まだまだ手前ですから（笑）。祈り会でも、黙ってみんな祈って、おしまいというのが一番いいよ。これが最高の祈りなんです。

とにかく、この涙の源泉は、エレミヤは本当に泣かんとして、

「涙の泉とせんことを」

と言って、本当に嘆きを嘆きとしようと思った。それで「涙の泉」としました。

涙の泉は、知らない間に何の泉に変わるのかな？　歓びの泉に変わる。御霊がくると、歓喜の泉に変わる。

「悲しみを変えて、歓びにする」

と、書いてあったでしょ。イザヤ書の61章。

「3 **灰にかえ冠（かんむり）をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ 悲哀（かなしみ）にかえて 歓喜（よろこび）のあぶらを予（あた）え うれいの心にかえて讃美の衣をあたえしめたもうなり**」

（イザヤ61・3）

「歓喜（よろこび）のあぶら」は聖霊のことです。歓喜の御霊。本当のクリスチャンは一番深い涙をもっている。また、一番輝かしい歓喜をもっている。絶対矛盾の構造をもっています。それがパウロがローマ書の8章で言っている「御霊の呻き」です。

「聖霊言い難き呻（うめ）きをもて執り成し給う」

という、この兄貴〔小池政美 1895～1921〕がこれを書いておいた聖霊の呻きです。

私の兄貴があの句を好きだった意味も分かる。まぁこういうことは言いたくないけれども、兄も素晴らしい相手をもっていたのだけれども、その女性が他の人と結婚してしまったから。彼は十字架を荷なって出掛けて行った。

「もう結婚はしない」

と決意していた。

「あの人と結婚しなければ、もう結婚しない」

と。その気持がこの句にあることを私は知っている。藤井先生はその消息を御存知だったものだから、兄を「暁の星の如き」と言ってくださったのだけれども。

そんなわけで、皆さん、いろんな経験に遭っても、どうぞ、涙の泉が今度は歓びの泉に、歓喜のあぶらをもって、そして、涙を通って光がくるというと、虹と光る。この事態を、もうその現実を地上において、この惨憺たる地上の現実で天国を自分のうちに本当にみずから開示していくところの事態をもたなかったら、

「すべて空の空なるかな、すべて空なり」

と。あるいは自殺するのが本当かもしれない。まぁそれくらいなもんですよ。それをいろんな他のことでごまかしているわけです。「ごまかす」といっては悪いけれども。それは、

「どっこい、どんなことがあっても」

というのがこの福音の世界ですから。どうぞ、そのことで勝ってください。

では、終わります。

＊

〔文庫編集者註〕

１９２６年11月19日付けの「辰雄日記」に次のような記載がある。

「……１９１９年の秋は、政美兄上や高島鴻子おば様や嘉代子様の秋であったばかりでなく、今、生きて、再びめぐりて僕の秋であるのであります。ああ、その日は1919.11.19であった。「O Autumu 1919!」」

「1919 AUT.」の刻印のある十字架のスケッチあり。これは高島鴻子夫人とペアで作製されたという十字架の一つであろう。『霊界の星々』第一篇 生い立ち「乳児時代～東大時代」

に次の記事あり。

「メイフラワーに乗って再び帰国を想わなかった清教徒夫妻の如き悲願が彼は遂げられなかったので彼は銀製の十字架を秘かに携えていた。それには「１９１９秋」と英語で浮き刻りが施されてある。ロンドン赴任を曲げられた官界に愛想をつかし方向転換伝道の地図すら既に準備していた。

――7年の年はめぐりました。けれどもけれども、昔の祈りは今もなお、天の二人〔政美と鴻子〕と地の二人〔辰雄と嘉代子〕に。これぞ人生の厳粛味！主エス様の御名のみたたえて、この四人は与えられ、とらるべく、地の旅をしたし、またせんとして居ります。どうかどうか、このことをのみ人生と思わせてください。この心のみ人生と思わせてください。……」。

また、１９２７年６月29日の日記には、

「……ダンテがベァトリーチェからGruß〔会釈〕をVerweigern〔拒絶する〕拒まれたとき、彼に人生の深みへの口が開いた。藤井先生の御奥様が召されたとき、先生へ大使命がくだされた。「羔の婚姻」。ベートーヴェンの聾は何であったか。ミルトンの失明は何のためであったか。兄政美に嘉代子様が小樋となったのは、彼の「純」のため。政美兄上が天の星になったとき、辰雄は別な道へつれて行かれた。母上の失明が、私に一つの深きものを教えている。……」

また、１９２７年８月18日付けには、

「……神様、小樋よ！小樋よ！と云いて行きたる人の上に、我が為に数えきれぬ十字架を負いし母上の上に、神様、私の祈りの最も切なるものをききたまえ。アーメン。」

とある。辰雄日記を読むと、高島鴻子と嘉代子の母娘は、政美と辰雄の若き兄弟にとって信仰上の伴侶的な姉妹であったことがうかがえる。「嘉代子様」の名は辰雄日記の１９２５年から１９２７年にかけて多く散見される。高島鴻子夫人(1987/12/15～1924/8/2)に関しては第九巻『感想と紀行』「九、高島鴻子小母さま」に詳述されている。また日記には辰雄宛の高島母娘からの手紙の一部が記されていて、辰雄にとってその存在が大きかったことがうかがえる。なお「辰雄日記」はホームページ「小池辰雄文庫」（または「エン・クリスト文庫」）の「日記・書簡」の頁に掲載されている。